

## 現地レポート

# 欧州に在住して感じる IS の脅威

## テロ犯は英国生まれの移民2世

2001年9月11日の米大規模中枢テロ以降、欧州でもイスラム教過激思想に染まった青年たちによるテロが発生してきた。

典型的な例がロンドンの地下鉄とバスの自爆テロ(2005年)で、教育程度が比較的高く、中流家庭に育ち、特に宗教に熱心だったわけでもない移民2世の青年たちが実行犯だった。

イスラム・テロといえば外国からやってきた人物によるものというイメージがあった英国で、自国で生まれ育った青年たちがテロ犯であったことは大きな衝撃となった。イスラム教徒の国民に「テロリスト予備軍」という疑念の目が向けられることになった。

筆者自身も、電車に乗っていてイスラム教徒っぽい男性を見ると複雑な思いがしたものである。差別はしたくないが、いつ何が起きる分らないという不安感におそわれた。電車や駅構内で不審なものがあったら、絶対に触ってはいけないというアナウンスメントが出て、ゴミ箱が撤去されたこともあった。人が多く集まるところが危なかった。

## 普通の母親たちも IS に呼応

ここ2年ほどの間に、テロの脅威は新たな段階に進んだ。その理由は「イスラム国」(IS)の誕生・拡大だ。ISは拠点がイラクやシリアであり、一見、欧州市民にとっては関係がない動きにも思えた。しかし実際には、欧州各国に住むイスラム教徒の市民に対し、ISはソーシャルメディアを巧みに使い、シリアに渡りISのメンバーとして戦闘行為に参加するよう呼びかけていた。

こうした誘いに乗るのは、かつては青年たちが中心であった。最近では家庭を持つ若い母親たちが子どもを連れてトルコなどに向かい、そこからシリアに向かっている。一見過激派とは思えない、普通の男女が突然、他の家族にも行き先を告げないままに家を出てしまう。捜査当局の懸念は、シリアで戦闘行為に従事した人が本国の欧州に戻った際に、反西欧の思想から欧州市民にテロを働く可能性だ。

隣人の娘や息子たち、あるいは朝、学校に子どもを連れてくる母親たちが、突如シリアに向かってしまう事態になっているので、いつ誰がテロリスト予備軍になるのか、本当にまったく分からない。

## 日常生活に潜むテロ遭遇リスク

過激思想に染まっていない、いわゆる「穏健な」イスラム市民が大多数であることを非イスラム系市民は十分に知っている。だが、今年3月には欧州市民がよく訪れる観光地の1つ、チュニジアでイスラム過激派武装集団によるテロが発生し20人以上が殺害された。また8月21日にはアムステルダムからパリ行きの特急電車内で、イスラム過激主義に染まったと見られるモロッコ人男性がテロ未遂事件を起こした。筆者自身が夏の休暇でフランスから戻ったばかりで、同じタイプの特急電車に乗っていた可能性は十分にあった。テロは不意に、非常に身近にわが身にも起こる。しかも、休暇先でも巻き込まれる恐れがあるのである。

毎日を怖がって生きているわけではないが、交通事故を危惧するのと同じレベルで、「いつかは自分も遭遇する可能性はあるだろう」という思いは常にある。 (ロンドン在住者) ■